

いま書く

2026.3.12

8ページ

九折空也

わたしの話を、いまでも誰か、聞いてくれるだろうか。
わたしの話を、いまでもまた聞いてくれるだろうか。
わたしは、いま書く。
わたしは、この書き方を忘れたわけではない。
稽古に反する書き方だ。
切なさに従った書き方。
本当には、これが稽古に反しているわけではない、この切なさの、
行き先を得るために稽古が必要だった。
稽古は厳しいものだ。

けれどもその稽古は、切なさの行き先を得るためにある。
稽古は、ただの流路の獲得であって、その流路に何が通るのかといえ
ば、やはり切なさだ。

切なさとは、「いま」のことだ。

なぜ、「いま」が切ないのかというと、それはやはり、われわれにこ
ころがあるからだ。

「いま」は、毎秒過ぎてゆき、決して帰ってこない。

だから切ない。

こころは、そう簡単には、その切なさに耐えられない。

だからふだんはごまかしている。

自我を騒がしくして、切なさに直面しないようにがんばっている。

この世界には、愛も夢も光もあるのだろうが、そうなることますます切
ないので、われわれはこころをなるべく遠ざけ、なるべく閉ざし、なる
べくごまかして生きてしまう。

そのことだって、あらためて見れば切ないことで、さらに合理的に見
るなら、あわれなことだ。

悪いことではない。

悪さなんかどこにもない。

わたしはなるべく、あなたに「方法」を与えようとして書いてきた。
方法とはつまり、その切なさ、こころの働どうくきを、どこへ持って行った
らいいのかという話だ。

ただ、いまは、あなたに方法を与えるために書くということをしな
い。
わたしは、おれは、いま、「いま書く」ということをする。
いま話している。

「いま」に方法などない。

それは、「いま書く」という方法だと言われたら、そうかもしれないが、そのように混ぜ返すことは、いまここではふさわしくない。

おれは、いま書くという、この書き方を忘れたわけじゃない。

現象と謎の究明にかまけていただけだ。

この切なさは何なのか。

この切なさをどうしたらいいのか。

誰だって、おれと同じように、書けばいいし話せばいいが、なぜかそううまくはいかないのだろう。

稽古がいる。

じゃあ、その稽古とは何かとって、そのことを究明する必要があったので、究明してきた。

おれの話は、おれの話だが、ここに響いて聞こえているのは、半分がたあ、あなたの声だ。

あなたは、本当には、こころの切なさから話すというようなことが、そんなに達者にできないから、そのあなたの未然の声を受けて、おれが話している。

あなたの切なさが、あなたの声であって、おれはそのあなたの声をリフレクションして——跳ね返して——ここに出現させている。

あなたの切なさ、あなたの未然の声を、反射して、稽古の流路に通している。

それで文面が現われ、話が現われている。

文面でいえば、あなたのインクで書いている、と言ってもいい。

おれの言っていることが、意味不明で、理解できず、把握などしようがないのは、前もってわかっているし、何の問題でもないの、気にしなくていい。

ただ、なぜかあなたは、おれの話を知っているはずなのに、あなた自身にカタルシスがあるだろうということだ。

それだけでいい。

なぜおれが話しているのに、あなたにカタルシスがあるのか。

それはやはり、おれがあなたのインクを使っているからだ。

あなたの、行くあてのない苦しいインクが、ここで勝手に使われて、ふさわしい形にされて浄化されているから、あなたが精神浄化を体験している。

ここであなたがするべき、唯一のことは、トチ狂わないこと、それだけだ。

おれは今回、何も教えない。

どうせ、勝手に教わってしまうところはあるけれども、恣意的には教えない。

もともと、おれは教師ではないのだ。

切なさを、跳ね返して、稽古の流路に通し、捧げて、そのかわりに命を享ける。

おれが忌避しているのは、切なさといって、それを「そうなんです」と誤認して、感情的に振り回されることだ。

感情は、わかるけれど、それは自我に生じるものであって、ここに生じているものではない。

切なさは、常に、こころが体験すること。

「いま」が「切ない」。

切なくて、こころは本来、魂を呼び、命を享ける。

魄を吸い、身体は精魄となり、霊に満ちるのだが、今回はそういうことを教えない。

「こころおよびこころの真ん中（精）には、「思う」という機能はないのだ。

ただ切ないだけ。

切なさ、捧げられて、命を享けるとき、こころは歓喜していると言えはいいの、満たされて、救われて、安らいでいる。

こころは何かを思っているわけではない。

こころはただ、切なく、救われもするし、歓喜もするだけ。

多くの人は、自我とこころの区別がついていない。

わかりやすさのために、極端化して言えば、あなたから見るとおれ、

「こいつ」にだけ、まったく別のものが視えている。

自我とこころはまったく別のものなのだ。

美容院に、美容師がいて、店内に金魚鉢があつたとして、金魚鉢と美容院はまったく別のものだ。

金魚鉢にエサを入れても美容院が満ちるわけではない。

だから、自我に刺激を入れてもこころが満ちるわけではない。

それぐらい、はつきりと、自我とこころは別のものだ。

おれにはそれが、物理的にとりかかるといふほどはつきり視えている。

あなたには、金魚鉢と美容院の違いがはつきり視えていて、

「ものが違うし、置いてある場所も違うじゃん」

あなたがそう当たり前言うように、おれの視界には、自我とこころがまったく別のものとして明視されている。

あなたが何のためにいまここにいるのかも、こころのこととして、おれからは視えているが、あなたは何のためにいまここにいるのか、自我で捉えようとして、見当外れの認識を抱くのだ。

あなたはハサミと櫛くしを手に持ち、金魚鉢をのぞき込んで、

「？」

と、自分のことがわからないでいる美容師だ。

こころはつながっている。

こころをつなごう、ということではなく、こころはもとの事象の性質としてつながっている。

あなたのこころと、おれのこころと、それ以外のこころもつながっている。

それは大前提で、こころがつながっていないと話にならない。

おれはいま、煙草を吸っている。

いつもどおりの、バージニア葉の手巻き煙草だ。

三月の中旬に入り、夜風はずいぶん冷たいが、翌週には桜が咲き始めるかもしれない。

おれの部屋には、一眼レフや、グレートリバーのマイクプリアンプ、GAPのコンプレッサー、アンテロープのオーディオインターフェイス、

ノイマンのマイク、等々、わけのわからないものが増えてしまった。

おれの後輩は、アホなので、おれにそそのかされて、渋谷でフェンダーのアコースティックギターを買った。

（おれはギターは一ミリも弾けない）

（そいつはいちおう、エレキは弾ける）

おれはいつでも、早朝の三宿通りに吹き込む春の光と雲のゆらぎを思い出すことができる。水色の絵の具で描いたような空だ。

最近マウスを、ロジクルの、高級マウス、MX MASTER 3S というものに買い換えたのだが、さすがにこんな値段がするだけあって、使用感も操作精度も抜群にいい。

アメリカとイランはもう何十年も犬猿の仲で、いっそ不倶ふぐたいてん戴天と片付

けてしまいたくなるが、誰も代案など示せようもない中、それでも直観としてはわれわれはげんなりするしかないのだった。

かつての冷戦で、米ソについては、まだ「お互いにやめればいいのに」と言いうるところがあったが、ここにきて欧米とイランのあいだには、米ソほどの歩み寄りの余地さえ見えない。

もし、おれにできることがあるとしたら、それは、アメリカ人が読んでもわかることを書き、イラン人が読んでもわかることを書き、ソ連人が読んでもわかることを書くことだと思ふ。

自我とところはまったく別のもので、ものが違うし、場所も違うというようなことは、どの国の人だとか、どの民族だとか、どの宗教だとかは関係ないことだろう。

おれさまの視力を担保にして、断言するが、どの国の人でも、どの民族の人でも、「こころ」それじたいはまったく変わらない。

個々人において、自我・人格がこころから遠い人と、自我・人格が、いくらかでもこころに近い人がいるだけだ。

犬や猫にだってとうぜん「こころ」がある。
マイケルジャクソンが話しているのはなぜか日本語に聞こえる。

じつさいには、彼はもちろん英語を話していて、日本語の字幕がついているだけなのだが、なぜかふと気づくと、英語を話しているようには聞こえないのだ。

英単語が日本語に聞こえる。

本当に「ことば」が存在するのかもしれない。

こころはつながっている。
それは、観念ではなくてだ。

あなたはいま、あなたの切なさ、おれの切なさが、つながって共有

されているということがわかるはずだ。

へんな体験をしている。

へんな体験をさせられている。

本来体験というものはそういうものだ。

なぜ文面に「切なさ」なんてものが体験されるのか。

切なさがあるし、なぜか「懐かしさ」もある。

懐かしさというのは、思いがけず大きなキーワードになる。

懐かしさの理由は、「原初」だからだ。

相対性理論が示すように、この世界においては、何もかもに時が経過しているわけではない。

時の流れというのは、とても、非常に、たいへん、あやしいものだ。

円や三角形といった図形に、時が流れているわけがないように、魂や命にも時は流れていない。

「去年の神」や「三十分前の神」などはないように、時の流れていないものがある。

時が流れていないということは、それはずっと原初のまま、ということになる。

仮に、二千年前の人々を見ている神がいたとして、その神がいまのわれわれを見ているとしても、神の側では時は流れていない。

だから、われわれが神を見たとしたら、その神は必ず「原初」という感触で得られるはず。

「懐かしい」というのは「原初」なのだ。

古代エジプトのアメンホテプ王や、古代ギリシャのソクラテスなどは、なぜかわれわれにとって「懐かしい」のだ。

われわれは、病院で母体から生まれたのであって、海から生まれたわ

けではないが、なぜか海を見ると「懐かしい」という感じがする。おれがいまこうして話しているのは、まったく最先端という感じはしない。

ショート動画のコメント欄やSNSのツイートなどを見ると、そちらは最先端という感じがする。

こころは、つながっており、こころは魂を呼ぶので、そのときすべての営為は懐かしいのだ。

懐かしくないものはこころがつながっていない。

こころのつながりは、切なさのつながりであって、切なさというものはどうしようもないが、なぜか、

「あのとき、あの場所に、あの人がいてくれて、よかった」

という、よくわからない体験をする。

体験とはそういうものだ。

切なさが、その痛みが、なぜかこころを鼓舞するものに変わっていく。苦しかったものが、転じて、なぜか明るく、永遠に自分を支えるものになる。

こころはつながっていて、それは切なさのつながりで、それが永遠の魂を呼ぶのだから、われわれのこころは「いま」と「永遠」を共有するのだ。

それじたい切ないが、切なくて、けれども、それでいい、としか言えない。

おれはつくづく、執念深い奴で、しつこい奴だと思うが、それは何も、こころが折れない奴ということではなく、こころが折れる理由がないのだと思う。

あのときのことを、いまもやっつけていて、たぶんこいつは永遠にこれを

やるのだと思う。

あのときも、「いま」をやっつけていて、いまこのときも、「いま」をやっつけている。

われながら、こいつは本当にしつこいな。

こころは、つながっていて、それは観念的なことではなく、物理的というほどにつながっている。

それは、つなげたというわけではなく、原初において未分化なのだ。つなげたわけではなく、そもそもが分かたれていないということ。

自我は発達するが、こころは発達しない。

こころは、原初に向かって進んでいく。

自我は、時代や状況に影響されて、発達のほうに向かって進んでいく。

それぞれ、進化の向きが違う。

おれは、ダヴィンチリゾルブという動画編集ソフトの有料版を持っていて、それを手慣れて高速操作できるぐらいに、この時代に適合した進化を遂げている。

けれども、だからといって、おれのこころが令和の陽キャになっていくわけではない。

おれのこころは原初に向かい続けている。

あたらしいおれのほうが、むかしのおれより、時代を超えて、古く懐かしいのだ。

すべてのことがよくわからなくなってしまふのは、人々が切なさを手放してしまうからだ。

こころに、切なさを抱えきることができず、それをつい、こころから棄ててしまう。

棄てられた切なさは、自我に流入すると、つらいさびしさにもなるし、

悲しみや怒りにもなる。

そして何より、強力な「悲観」にもなる。

悲観は、際限がなく、無制限に不安をもたらす。

閉塞して、不安が絶対化する。

すると、恐怖、恐慌、強迫にむしばまれ、人の自我は、不本意かつ不作為な挙動を起こしてしまう。

自分の感情がヘンになり、自分の行動がヘンになり、自分の表情、自分の声、自分の態度、自分の言動、ことごとくが「何かヘン」になっていくのだ。そのとき、当人は自分の何がヘンなのかを検出することもできなくなる。

切なさがあるべき流路を失うとそうなる。

流路を失うと、切なさは内圧を高めてゆき、ここに抱えていられなくなり、ついに壁を決壊させて、自我の内部に流入する。

すると、自我は、流入した多大な情動に溺れるのだ。

懐かしさの中で発狂する人はいない。

「いま」の切なさが、原初、永遠への流路を得て、「懐かしい」……

さあそれで発狂しようね！ という人はさすがにいない。

世の中で、大きな災害や戦争が起こるたびに、人のこころはぐらつき、あるべき永遠への流路を失う。

当たり前だ、誰も彼もが、稽古をきわめた高僧のように鋼鉄の流路を形成してきているわけではない

東日本大震災、原発事故、新型コロナウイルス、ロシアウクライナ戦争、ガザ地区戦争、欧米とイランの戦争、台湾の懸念など、有事のたびに、流血のたびに、腥さのたびに、町が壊されるたびに、流血を啜つて肥る者を察するたびに、人のこころは明るさを失う。

なぜこころが暗くなるかというと、罪を目撃しているからだ。

罪を目撃し、自分（たち）のこころが、もう永遠の命には至らせてもらえないのじゃないか、と感じて暗澹とする。

それで、閉塞し、悲観が募り、じきに不安が破裂する。

災害や戦争だけでなく、二〇二六年三月現在、エプスタイン島にかかわる告発と暴露——おそらくむごたらしくおぞましい性的陵辱をしているのだらうということ——においても、人々は人類の巨大な罪を目撃しているのだ、そのことでもまた、人々のこころは動揺し、明るさを失っている。

明るくて楽しい芸能人が、半グレとつるんでいたとか、パワハラをしていたとか、セクハラをしていたとか、薬物をやっていたとかで、告発されると、事実のていどが確認されなくても、人のこころは勝手に明るさを失っていく。

罪に触れるたび、人のこころは切なさどころではなくなるのだ。

そのときになって初めて、これまでが赦されていたんだな、ということを知る。

いや、多くの人は、そのことにさえ気づかない。

多くの人は、ただただ、時代と状況に呑み込まれていく。

だから、そんな愚かしいことになりきってしまう前に、おれの話聞くべきだ。

なぜ権力者たちが、成功者たちが、エプスタイン島に馳せ参じたか。

それはこころの切なさが抱えきれなかったからだ。こころのつながりが視えなかったからだ。

自我・人格が、こころから遠ざかりきったからだ。

「いま」も「永遠」もなかったからだ。

何ひとつ懐かしいものは得られなかったからだ。

流路なんかあるわけもなく、すべては決壊して自我に流れ込んだ。

彼らが、成功者として「充実しています」というふうを見せかけていたのは、平たく言って全部ウソなのだ。

全部ウソで、流路が皆無となったころの閉塞は、不安に破裂し、その膨大な情動は自我に流入しつづけた。

自我は流入物の奔騰ほんとうによって肥大ひだいしていく。

権力を持つ彼らの肥大した自我を差し止めるものはこの世に存在していない。

それで、必然、エプスタイン島へのお誘いとなり、その誘いは、渡りに船ということになるのだ。

人は、ふつうそこまで権力を持ってないというだけで、権力を持つてば誰だってエプスタイン島に馳はせ参じる。

それは、人の仕組みなのだ。

人の業（カルマ）、人の罪だ。

多くの人は、「自分はそのんことを決してしない」と思っているが、それはじつさいにはその権力を手にしていないからにすぎない。

力ちから、手てにして初めて、発現する遺伝子があるのだ。

だから、力を手にする前にあれこれ良識ぶっていることにはあまり意味がない。

車を持っていない人が「おれはスピード違反をしない」と言っているようなものだ。

どんな生真面目な公務員でも、相当な金額を積みめば、寝返って情報を売るし、スパイにもなる。

寝返らない場合は、単に金額が足りていないか、マイナスの要素、

「失脚させるぞ」という要素が足りていないだけだ。

ハニートラップで、スキャンダルを握り、「失脚させるぞ」「お前の家族も無事ではすまない」と脅して、その上で金を積み、「どうかお願いしますよオウ」と、人情味あふれる低姿勢で寝返りを持ちかければ、原則、誰だって籠絡ろうらくできる。

それはやはり、人の仕組みなのだ。

原則、という言い方をしたのは、やはり例外的に、逆に狂っている人もいるからだ。

狂くるっているのだ。じゅうぶん以上の金を積み、なお寝返らない人というのは、気が

あなたがまともな人なら、あなたは金額で寝返るし、彼がまともな人なら、彼は金額で裏切る。

誰でも、「自分はそのんことをしない」と思っているものだが、それもやはり、目の前に札束が積まれていないからにすぎない。

富に手をかけて初めて発現する遺伝子が、やはりあるのであって、富を手にかける前に良識ぶってあれこれ言うことにはあまり意味がない。

ただ、例外的に、「あの人」はまともじゃないということがあれば、そういう人に限っては、本当にいくら金を積んでも無駄、売春島に誘っても無駄、ということがある。

あの人気が狂っているから無駄。

こころの切なさ、原初へ、永遠へ、捧げられる、そこで魂と出会い、命を享うけるといふことが、当たり前になっただけで、気が狂っているのだ、もう人の仕組みから逸脱しているのだ。

売春島へ誘っても来ない、どれだけ金額を積んでも寝返らないというのは、善人の行ぎょうじょう状ではなく、ただそれ以上の何かを掴んでしまっ

る人の行状だ。

力と欲望の遺伝子は、発現しているのに、それより上位の、もはや遺伝子ではないもの——命——が発現していて、例外になってしまっている。

エプスタイン島に誘ったら、冗談でなく、勧誘者はその場で斬り殺されることもありうる。

斬り殺される上に、「こころはつながっているのです」と静かに説かれるのだとしたら、それはもう何か、得体の知れない恐怖がひとしおだ。

こころがつながっているのに殺すのかよ……

こころはつながっている。

つながっているのではなく、原初は未分化だからつながっている。

いま書く。

切なさで書く。

いささか、話はバカみたいになってしまったけれど。

あなたのインクで書く。

あなたの声で話す。

おれが、あなたのインクで書き、おれが、あなたの声で話す。

「いま書く／了」

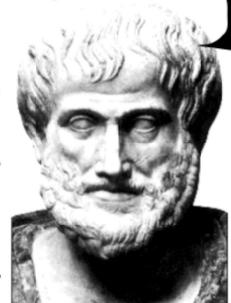
2026年にこれが描かれたという事実

みんな元気が ブルマ



唐突に呼び出された何の脈絡もないカニ

(弁論)
これは
カニ
ですね



アリストテレス